

ホッと
スペース
中原

弱さが弱さと出合う時 生まれ出る「恵み」



▲デイサービスにいられた利用者の方々と
佐々木さん（中央）



◀中原キリスト教会・NPO法人「ホッと
スペース中原」
神奈川県川崎市中原区下小田中1丁目19
- 21 Tel. 044-777-7599

〈隣人愛の実践の場で〉

JR南武線武蔵中原駅から徒歩七分。幹線道路を側道に入るとすぐ、正面に十字架を掲げたアースカラーの建物が見えてくる。道に面した一階は全面ガラス張り。その窓越しに、明るい話し声が聞こえてきた。

「外から様子がわかれば、地域の人も安心でしょう。何より、お年寄りの元気な姿を見るのは誰にとってもうれしいですよね」そう話すのは中原キリスト教会の牧師で、「ホッとスペース中原（以下、ホッとスペース）」代表の佐々木炎さん。

施設では、誰もがかけがえない存在という共通理解の下、聖書が示す「愛すること」の実

神奈川県川崎市にあるNPO法人「ホッとスペース中原」は、中原キリスト教会（日本聖契キリスト教団）の牧師・佐々木炎さんが、教会を拠点に開始した地域福祉の活動が始まり。一九九八年より、デイサービスや訪問介護等の高齢者ケアとともに、障害者や子育て、生活困窮者の支援、触法者支援、虐待被害者への対応など、幅広い活動に取り組んでいる。佐々木さんが「教会の『交わり』の実践の場」と呼ぶ、支援の現場にある恵みについて聞いた。

践を念頭においたケアが行われている。困り事をただ解消すればいいとは考えず、問題を共に考え、共に背負い、共に耐える姿勢を大切にしながら、利用者の心に寄り添う全人的ケアだ。

「無駄な病気なんてありません。たとえば認知機能の衰えも、余計な見栄やしらがらみ、無理を捨てていく旅路と捉えることができる。その旅路にケアする者が伴い、苦しみや悲しみを共有して一緒に耐える中で、支援を受ける人は力を得、本来の、そして、新たな自分の生き方を見つけていけるのです」

そんな対応は、自分に尊厳があることばで理解できない人にも、肌で感じていただき、生きる力につながるができる。



▲年間 50 ～ 60 もの講演を全国で行う佐々木さん。教会では企業と連携した食料支援も実施。「隣人愛をした
いのはクリスチャンだけではない。志あるさまざまな人々と
協力すれば、教会にできることはまだまだある」

良い面があることに気づく。
ただ、酒への強い依存からは
なかなか抜け出せず、夜、部屋
で泥酔しては、つらかった出来
事への怒り、親への恨み言を叫
び、うさを晴らす日が続いた。
しかし一年半がたつ頃、つい
に心身が破綻寸前となり、本山
さんは佐々木さんに連れられ病
院へ。適応障害の診断を受けて
投薬治療が始まると、それを機
に断酒。精神が徐々に落ち着い
てきた頃、転機となる出来事が
起きた。

ある晩、本山さんが部屋で休
んでいた時のこと。頭にふと、「あ
あ、俺は今まで頑張ってきたな」
ということばが浮かんだ。次の
瞬間、涙があふれ出し、本山さ
んは号泣。「ああ、そうだ、俺は
頑張ってきた」と、泣きながら
何度もその事実をかみしめるう
ち、「よくやってきたよ、おまえ
は！」と、初めて自分を受け入れ、
労うことができた。
「そこに至らしめたのは、多く
の人たちとの出会い、築いてき
た関係です。僕はケアする時、
どんな人でもいいところを見つ
け、『あなたは素晴らしいものをも
っている』と話しますが、相手
のために語ったことばが、気
づかぬうちに、自分に返ってき
ていた。僕はケアする人の中に
自分を見て、いつの間にか自分
のことも、ケアしていたのです」
例えば、友人や先生からも、
肯定的なことばはたくさん受け
ていた。自己否定の声があまり
に大きく、聞こえていなかった
のだ。大きな気づきを与えられ

た本山さんは、今、自分を好き
と言えるようになり、自分の幸
せのために、ここで働きたいと
感じている。
〈弱さが出会う時、生まれる恵み〉
悩みや問題を抱えた当事者ど
うしが出会い、お互いの重荷を
負い、関わろうとする時、そこ
に気づきや癒やしが生まれる。
それは聖書が示す真理にも通じ
た、教会にある交わりの姿その
ものと佐々木さんは言う。
「『当事者』ということでは言え
ば、究極の当事者はイエス・キ
リストです。キリストは人間の
罪の贖いのために十字架にかか
り、肉体的な痛み、理解されな
い孤独、見捨てられる悲しみを
負う当事者となられた。それに
よりもたらされた救いを誰より
も知る教会は、弱さをもつ人と
の関わりを積極的に求めていく
必要がある。問題の解決を偉い
先生や牧師に求めるばかりでな
く、周囲の自分より大変な中に
ある人に関わる時、見えてくる

もの、生まれる恵みがあるので
す」
佐々木さん自身、非嫡出子と
して生まれる運命の下、過酷な
貧困、虐待を経験、支援を要す
る当事者だった。「生まれてこな
ければよかった」と、自分の生
を呪う中でキリストに出会って
今の働きに導かれ、ここで変え
られていく人を見るたびに、弱
さが響き合う時に恵みが生まれ
るという確信を強めている。
「コロナ禍で、人との距離が
離れるようになった今、困って
いることが見えにくくなってい
ます。助けを求めることを諦め
た人に希望を届けたいと僕たち
は試行錯誤しているところです。
それは側から見れば、福祉、か
もしれないけど、実は、教会を
を建て上げるつもりでやってる。
目の前の人に関わる、この小さ
な交わりから、恵みあふれる神
の国の実現があると信じている
のです」
(伊藤千賀子)



▲施設の3階に入居中の女性。寝た
きりだが、「何も不便がない。すぐ友達
に会えて安心」とのこと



▲明るい雰囲気の多目的スペース。施
設では同性介護を徹底している



▲利用者も洗い物に
参加できるよう、シンクを
両面につけた台所。使い心地を
優先し食器はプラスチックでなく陶器

確かに、この日、出会った利用
者たちは、皆、くつろいだ、豊
かな表情で交わりを楽しんでい
て、今を喜ぶ恵みの中にいるこ
とが伝わってきた。
しかし佐々木さんによれば、
ここで恵みを受けるのは、利用
者だけではない。
「支援を求めて来る人は、ケ
アする側の者たちに、良い変化
をもたらすよう神様にミッショ
ンを与えられてきた使者でもあ
ります。彼らと関わる時、僕た
ちはいろいろな面で自分の価値
観や考え方を考える必要に迫ら
れる。たとえば知的障害者の人
がたわいのないことで大喜びす
る姿に、幸せになるのに大金や
高学歴は必要ないことを教えら
れたり、身体機能の衰えが進む
高齢者に、全てをゆだねるとい
う、人間にとって最も難しい仕
事への向き合い方を教えられま
す。心の中にいつからか根付き、
凝り固まった能力主義や効率主
義が、そうやって緩まされ、悔
い改めさせられる時、ケアする

側の僕たちも、良い変化、癒や
しを受けるのです」
〈送ったはずの愛のことばが自分に〉
この日、そんな恵みを受けた
体験を、スタッフの一人、本山
弘明さんが聞かせてくれた。
本山さんは、大学卒業後、二
年前からホッとスペースで働い
ている。しかし、もともと福祉
に関心はなく、ここへ来た時は
むしろ、支援を必要としている
状態だった。
「中学の時に洗礼を受けたの
ですが、大学在学中、信仰心が
揺らぎ、神も自分も信じられな
くなりました。人目を気にして
ばかりの自分がとにかく嫌いで、
お酒の力を借りながらなんとか
日々をやり過ごし、ただ死ぬ理
由がないから生きているといっ
た、荒んだ状態でした」
友人の紹介でホッとスペース
に來た本山さんに、佐々木さん
は、「ここでやってみないか？」
と提案。迷った末、本山さんは
住み込みで働くことに。障害者

グループホームの食事や掃除、
相談などを任せられると、黙々と
働いた。そんな日がしばらく続
いた頃、心に小さな変化が。本
山さんは、支援を求めてここを
訪れる人たちに、共感を覚える
ようになった。
「精神病院に長く入院してき
た人、元受刑者、僕同様、アル
コール依存症の人など、さまざ
まな経歴の人がいました。親や
社会から見捨てられたような人
も多く、それが自分と重なって
見えたのです」
次第に、自分の自己否定の思
いが、子どもの頃、親から受け
た精神的虐待にあることもわか
ってきた。同時に、どんなに欠
点だらけに見える人にも、必ず

▶対応が難しいと思う人にも、諦めず、関わるよ
うになったと語る本山さん。「僕が諦めたら、その
人がまた行き場所を失うと思うから」

